

第34歩

春の胎動

令和2年1月中旬に国内で初めて新型コロナウイルス感染症の感染者が確認されてから、2年余りが経過しました。しかし、コロナ禍はまだまだ収束の気配を見せていません。それどころか、この原稿を書いている2月上旬においても、なお、新規感染者数が過去最多を更新するなど、これまでにない急激なスピードと規模で感染拡大が続いています。

厳しい冬の時代ですが、暦の上では、春はとっくに来ています。「立春」は2月4日。その前日の3日が「節分」でした。ご承知の通り、節分には「鬼は外、福は内」と掛け声をかけながら豆をまく風習があります。新春を迎える前に目に見えない悪いものを鬼になぞらえ、追い払おうとしたものだそうです。この節分の豆まきに倣って今みんなが直ぐにでも追い払いたいのは、「新型コロナウイルス」という目には見えない厄介な鬼でしょう。

鬼と言えば、高松市は、鬼ヶ島と呼ばれ、鬼の灯台のある女木島や桃太郎伝説の残る鬼無地区を有し、また、JR高松駅前や観光地では「親切な青鬼くん」のモニュメントが出迎えてくれるなど、鬼とはなじみのある土地柄です。だからと言ってコロナウイルスに居座られては困りますが、完全な退治は難しく、暫くはウィズコロナで鬼と共存の道を探らざるを得ないかもしれません。

また、今年の干支は「壬寅(みずのえとら)」。物の本によると、その意味するところは、「陽気を孕み、春の胎動を助く」とあります。冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になるということです。節分に期待する季節感にぴったりだと思えます。ただ、十二支で例えられる動物は、どう猛な「虎」です。虎の尾を踏んだり、春の氷に乗ったりすると命を落とすこともあるという危険なことのたとえで「虎尾春氷」という言葉もあります。

新型コロナウイルス感染症という現代の「虎尾春氷」を正しく恐れつつ、社会経済の維持を図りながら、ポストコロナで真に華々しい春の胎動が訪れる。そんな年になることを祈りたいと思います。

